

「急がず、あわてず、
ゆっくりと！」
—イエスの成長—

大津キリスト教会牧師・学院顧問

米村 英二師

幼子は成長し、
強くなり、
知恵に満ちて行った。
神の恵みはその上にあった。

(ルカ 2:40)

1. イエス様も成長された

■「幼子は成長し」とあります。イエスが成長なさったとは、何を意味するのでしょうか。初めから完成された人としてこの地上にいられたのではなかったということです。イエスは神であったにもかかわらず、「成長と発達」という命の法則に服しておられたのです。両親の助けがなければ、その生存さえ危ぶまれる無力な時期がイエスにあったという事実は、私たちに驚かせます。しかし人となられた以上、イエスもまた弱さから発しなればなりません。そして、強くなり、知恵に満ちてゆかれたのです。彼の従順、柔和、自己犠

②

牲、人生についての深い洞察と決断、これらはみな初めから彼に備わっていたものではなく、日々の成長によって得られたものでした。

■聖書は言っています。「彼は多くの苦しみを通して、従順を学ばれた」と。苦勞せず、何でも上手にやってきた人からは、われわれはたいして多くを学べません。あまりに完成された人からは、よし自分もやってみようというような靈感を受けることがないのです。むしろ、そういう人を見ると、われわれは落胆します。やっぱり自分はだめだ。とうていあの人のようにはなれない、そう思って自分がみじめになるのです。人はみな、いくらか弱いところのある人、欠点のある人、それにもかかわらず、あきらめず、前向きに生きようとしている人からのほうが、より大きな励ましを受けるのではないのでしょうか。私自身、牧師でありながら、日々の生活はというと、今なお失敗の連続です。怒ったり、不平を言ったり、不注意な言葉で人を傷つけたりして、家族や信徒の方にも迷惑をかけることが多いのです。そんな自分が情けなく思われ、あるとき、みんなの前で、「ほんとうに申しわけありませんね」と言ったら、ある方が、「そういう米村さんのほうが親しみを感じます。実のところ、米村さんのりっぱな証より、失敗談のほうが私の心には素直に入ってきて、慰められるのです」と反対に励ましてくださいました。多くの人が求めているのは、賢い助言より、共感なのかもしれません。自分だけではない。あの人も、この人も、自分と同じような弱さを抱えながら、それでも一所懸命生きている。そう思うと慰められ、勇気づけられるのでしょうか。

2. それは自然な成長であった

■人間を救うのに、天使ではなく、人の子として誕生されたイエスを、神が用いられたのはなぜでしょうか。それは、われわれと同じ血肉をもってこの世に来て、さまざまな試練と戦い、悩み、苦しみながら、それらの戦いに勝利し、成長してゆかれたイエスの生き様から、われわれが多くの慰めと励ましを受けるためであったと言えるでしょう。ゲッセマネの園で、「どうか、この杯をわたしから取りのけてください」と祈られたイエスの祈りは、私たちの心を慰めます。イエスでさえ、大きな試練を前にして、恐ろしさのあまりたじろがれたのです。完全な人は人びとを引きつけません。もしイエスが単なる模範的な人間にすぎなかったなら、その生涯が、二千年たった今も、人びと



③

の心に新鮮な感動を与え、新しい生命を吹き込むということはなかったでしょう。彼には喜び時があり、悲しむ時があり、また怒る時がありました。彼の魂は私たちと同じように人生の多くの戦いを通して、強められ、高められ、大きくされていったのです。われわれはみな、イエスの、そのような姿を見て、自分も同じ道をたどり、そして成長したいと願うのではないのでしょうか。

3. それは時間のかかる成長であった

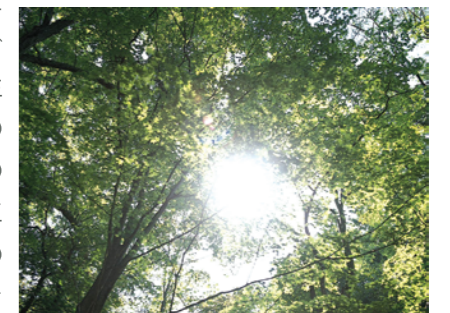
■イエスはどのように成長してゆかれたのでしょうか。その様子を知りたいと思って福音書を開いても、イエスの誕生の記事はあっても、その後の成長についての記事はそうたくさんはありません。あるのは以下のような記事です。「幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちて行った。神の恵みはその上にあった」(ルカ 2:40) 今ひとつは、少年時代に両親とともにエルサレムに上られたときのもので、こう書かれています。「イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人とに愛された」(ルカ 2:25) イエスの幼少時代の記事がこれほど少ないのは、公の伝道生涯に入るまでの30年間のイエスの生活が、割合に平凡なものであったということではないでしょうか。偉大な人物の伝記を書く人は、将来大人物になることを予想させるような幼少時の逸話はないかと探すものです。有名な「サムエル・ジョンソン伝」の著者ボズウェルは、ジョンソンの幼児期の記憶力について、こんなことを書いています。母親が、読み方を習い始めたばかりのジョンソンに、暗記すべき課題を与えて階段を上がってゆくと、3階にたどり着くか着かないうちに、後を追ってくる息子の足音に気がついて、「どうしたの?」と聞くと、ジョンソンは、「ぼくはもう言えるよ」と答え、どう考えても二回以上は読む時間がなかったにもかかわらず、すべてを正確に暗唱したというのです。偉人伝にはこういう逸話がつきものです。しかしリンカーンの場合は、少し違っていました。彼は、自分の幼年時代の資料を求められて、こう答えました。「私の子どもの頃の生活について何かをほじくり出そうというのは、およそばかげた企てだよ。それはひとこと、『貧しい者の、短い簡素な年代記』、これが私の人生だ。これ以上のことは、だれにも何一つ見つけられはしないよ」平凡な生まれであったリンカーンは平凡であることを何より誇りに思っていたのでしょう。「神は凡人を愛される。そうでなければ、こんなに多くの凡人をつくらなかつたらろう」と自ら語っている通りです。

■イエスの幼年時代も、リンカーンと同様、どちらかといえば平凡なものではなかったのでしょうか。驚嘆するような逸話

をそこに見つけることはできません。もしあつたら、記録されていたでしょう。でもそれはなかった。言い換えれば、イエスは子どものときは、背丈も知恵も、心も、子どもらしくあつたということです。彼は早熟ではありませんでした。不自然な英才教育も受けられなかった。イエスは、初めに芽、つぎに穂、そして実というように、ごく普通の順序にしたがって成長してゆかれた。こうして彼の生涯の基礎は、何ら特記すべきもののない、30年に渡る平凡な労働生活の中で築かれたのです。

■イエスが特殊でなく、普通の育ち方をなさったということは、われわれに何を教えるのでしょうか。われわれの子どもも、普通の教育でよいということです。彼らは、子どものときは、子どものようであるべきです。そして人生の最もよいものは、そのような普通で平凡な時間の流れの中で育まれるものなのです。私たちも、東京や大阪のような大都会ではなく、この大津という小さな町で子どもを育てることができたのを幸福に思っています。当時の生活は静かでした。集会に来る人も少なく、夕方になると英語塾で忙しくなりましたが、昼間は時間がある。当時、まだ、2、3歳だった長男を自転車に乗せて、よく散歩に出かけました。テレビや新聞、電話もなく、もちろん車もありません。ときどき汽車に乗って、阿蘇のふもと立野までゆき、山を眺め、また次の汽車で帰ってくる。それが家族の安上りの小旅行だったのです。子どもたちが幼稚園にゆく頃になると、今度はいっしょに図書館に通い始めました。自分の勉強もいぶんしましたが、子どもたちのために絵本もたくさん読んであげました。貧しくても平和な日々でした。結局、平凡で単調と思われたその時期が、子どもたちや私自身の人生のもっとも大切な部分をつくっていたのだと思います。

■イエスの成長はゆっくりでした。神は決して急がれる方ではありません。ところが私たちは急ぎます。なかなか待てません。子どもたちにも、できるだけ早く字を覚えさせようします。何であれ、彼らが少しでも人より早くできれば安心し、おそいと心配するのです。しかしイエスの成長には性急さはありませんでした。イエスは30歳になるまで、人に知られることのないユダヤの寒村で過ごされました。彼の生涯の大半は準備のために使われたのです。内村鑑三は、「読むべきものは聖書、学ぶべき



ものは天然、なすべきことは労働である」と言いましたが、イエスの品性もまた、豊かな自然と不断の労働生活によって、ゆっくりと時間をかけて形成されていったのではないのでしょうか。「ゆっくり」は神の方法です。自然を見ると、作物の生長はみなゆっくりです。人工的にそれを早めるならば必ず問題が出てきます。

■本もゆっくり読むべきだと主張したのは、フランスの作家、ファゲです。彼の書いた「読書術」は、かなり古い本で、今では入手が困難です。ところがある時、札幌の古書店で偶然私はそれを見つけたのです。でも値段がちょっと高かった。私は迷いました。迷った末、とうとう買わずに熊本に帰ってしまった。帰ったあとで後悔しました。それから二年たって再び札幌を訪ねた時、なんとその本は、同じ本屋の同じ棚に、そのまま売れずに残っていたのです。私は再会を喜びました。そして思った。この本は私に所有されるべく私の訪問を待っていてくれたのだと。私がためらわずその本を買ったのは言うまでもありません。ファゲの「読書術」は、多くある読書論の中でも第1級の部類にはいる古典の1つです。その第1章を開くと、有名な次のことばが書かれています。「読むことを学ぶためには、まず極めてゆっくりと読まねばならぬ。そして次には極めてゆっくりと読まねばならぬ。ゆっくり読むこと、それは第一の原則であり、そして絶対にあらゆる読書に適用されるべきところのものである」すぐれてよい本は常にゆっくりと読むこと、書かれた速さで読むこと、これがファゲの主張でした。それは、読書だけでなく、私たちの人生の歩みについても、言えることではないでしょうか。

4.伝道の為に時間をかけ基礎を築く

■伝道も、急いではならない。ゆっくりと、しかし休まず続けなければならないと言ったのは、内村鑑三です。伝道の初期に読んだ「若き伝道師に告ぐ」という彼の文章は、そのまま私の伝道方針ともなりました。それはだいたい、こんな内容です。

1. 伝道は忍耐のいる仕事です。10年以内に結果を得ようとはなりません。
2. 人を見ると、伝道はすぐにいやになります。だから人と交わることに1時間に対して、神と交わり聖書と親しむことを9時間とします。
3. 聖書を研究しなさい。伝道の結果は、聖書をどれくらい深く読んでいるかに比例します。
4. 求道者として1番希望があるのは子供です。次が青年、そして大人という順序です。
5. 伝道は神のわざです。自分は神に用いられる道具にすぎないことを片時も忘れてはなりません。

6. 勉強しなさい。読書を怠ってはいけません。あらゆることから蜜を得なさい。そして信仰を健全な労働と常識の上に築きなさい。

7. 清く生きて、聖霊に満たされなさい。

8. 時がよくても悪くても御言葉を宣べ伝えなさい。

これらの助言の中心にある思想は、伝道には基礎が大切であること、そしてしっかりした基礎を築くには時間をかけなければならないということです。「静かに(ゆっくり)行く者は健やかに行く。健やかに行く者は遠くまで行く」これは作家城山三郎のモットーでした。遠くまでゆこうと思えば、時間をかけ、ゆっくり進まなければなりません。イエスの成長もゆっくりでした。私たちも急がず、あわてず、ゆっくりと歩み続けるなら、きっと遠くまでゆけるでしょう。■

●この講義には続きがあります。(全3時間) 授業を収録したCD・DVDを御希望の方は学院事務局までお申し込みください。
・CD～1講義／500円 ・DVD～1講義 800円